

1. 研究テーマ 「地域と共に歩む新しい学びの形をめざして～総合学習を中心に～」

2. はじめに

K 中校区は、商工業が集積した浜松市中区 A 地区、T 地区と、農業を中心とする伝統的集落の H 地区の3つの地域からなっている。

中心となるT地区地区は、1990年代以降の都市開発によって従来の開拓地区から様相が一変した。組立型機械工業であるホンダT地区工場を頂点に一次二次下請け工場と、それらをつなぐ運輸業が計画的に配置され、またそれら製造業従業員の居住地域としてアパート・マンション・建て売り住宅が林立した。人口は連合自治会単位では市内最大の2万人を超え、スーパー・飲食店など商業・サービス業が基幹道路の周辺に整備された。その際、職住近接の理想的な町並みを作るという都市計画が立案され、各所に都市公園を計画的に配置し、公園同士を遊歩道で結び町並みを彩る多くのモニュメントと街路樹が設置された。広い道路と計画的に整備された公園を遊歩道がつなぐ町並み、という理想の町が作られたのである。

ところが、開発が形となって現れた90年代後半から、本校の荒れが顕在化した。一斉授業が成り立たない。中学校の「荒れ」はふつう問題行動生徒の集団による暴力行為や性的非行などだが、本校の場合、当然それもあるが、いわゆる普通の生徒が精神的に不安定なのである。荒れた学校学級を立て直す場合、教員は普通の生徒の集団をよりどころにし、正義と秩序が多数派になるよう集団を作っていくが、本校はその「普通の状態」がほとんど存在しないのである。秩序が逆転し、問題行動生徒の集団が学校を支配するだけでなく、「通常の生徒」も孤立し内面に不安を抱え、奇矯な言動が多発する。荒れのピークは通常数年で去ることが多い浜松の中学校のなかで、K中では90年代後半から2000年代中盤まで荒れが慢性化し、学校が学校でない状態が10年以上続いた。多くの教員が失意と挫折を感じK中を去っていった。他の学校で通用した自分の技量が通用しない。「K中なんかつぶれてしまえ」という生徒の落書きや、「先生方は一度この学校を経験するといいね」と行って退職したベテラン女性教諭の最後の言葉が忘れられない。

今までのやり方がなぜ通用しないのか。それは、この校区が90年代の新自由主義「構造改革」の中で都市化したことが大きく原因していよう。生徒が育つ、家庭と地域という2つの土台が崩れていったのである。

まず家庭について、機械工業は、多くの下請けを必要とし、底辺は無数の低賃金長時間労働によって支えられている。90年以降浜松に流入した多くの外国人労働者は、国籍がないことで国内法の適用が限られ、最低賃金保障さえままならない。製造業以上に流通サービス業は、規制緩和で労働基準が放任され、派遣労働が一般化し、ワーキングプアそのものの生活の家庭が増えていった。派遣労働とリストラの圧迫から、男性正社員は残業が恒常化し、家庭責任は強固な性別役割分業下で専業主婦に偏り、子育てのゆとりを欠いた母親らは不安・不満のやり場がない。

地域について言えば、開拓3世代目に当たる草分けの家は、農地を宅地・工場地に転売し、地主・大家となっている。彼らは、不動産管理会社にアパートの管理を委託し、管理会社は派遣業者に入居の権利を賃貸するから、住人が誰なのか地域の人は把握できない。外国人同士のネットワークはあるが、自治会など地域の旧来のネットワークが関わらない。商店もテナントとなり、経営者は別の地域から

出勤する。物質的には豊かで美しい町並みなのだが、公園やテナントの店舗は、親がいない時間の小中学生にとって、無法地帯となる。ゆとりのない親、絆を欠いた地域が、虐待と放任を生む。中絶・虐待と放任をすりぬけ、大人を意識せず傷つけ合うことに慣れた彼らが中学生となって K 中に集まってくる。町はできたが、子供が育つ人の絆がないのである。生徒の生活の背景と無関係に、「勉強と部活をがんばって、中学生らしく、いい学校をつくろう」という今までのやり方は、高度成長の恩恵を受けた浜松で今までうまくいってきたのだが、ここ K 中校区の 90 年代には通用しなかったのである。

K 中は「当たり前の方が普通にできる」を合い言葉に、学校の正常化に取り組んだ。それは、縦割り活動など特活・部活動の活性化や、カウンセリング・発達支援の校内体制の整備、わかる楽しい授業を目指す授業改善、など様々な動きがからまり合って進んだが、もう一つ大きな柱となったのが、3 年間を貫く総合学習のカリキュラムづくりだった。その理念は、「地域と共に歩む」という理念を原点に、K 中学校を地域の絆の結節点に作り上げようという試みである。地域の絆がないのなら、K 中が地域の様々な人をつなげる場所になればよい。K 中校区にある様々な人のつながりを K 中 3 年間の総合学習という糸でつなぐことをねらったのである。

3. 実践

(1) 「地域と共に」～本校の総合学習の背景について～

①総合学習と現場

総合学習(「総合的学習の時間」)は「新しい学力観」の代表教科として 2002 年指導要領で制度化された。この時期は、本校の「荒れ」が最もひどかったところで、他校が新しい総合学習をそれぞれの工夫で実施し始めていたころ、本校は、総合本来の授業時間を減らし、多くの時間を「教科総合」という形で他の教科に振り分けていた。自己追求型の総合の時間が、授業として成り立たず、授業崩壊の時間となったためである。「総合など止めてしまえ」というのが本音だったのであろう。総合学習は、「部活と勉強をがんばればよい」という中学校では現在でも余計なものにとらえる雰囲気がある。指導要領という「上から押しつけられたもの」のおかげで「現場が混乱する、いい迷惑だ、だいたい、総合の内容など考える時間が現場にがあるか」という感覚である。今回の指導要領改訂で、風向きが変わったのだから、総合も真剣にやらなくて良いという声もある。

そうだろうか。

まず、総合はなくなるのだろうか。

②総合はなくなるらない

文科省の「総合的学習の時間」は、日教組自主編成運動で提言された「総合学習」と同じ方向を追求して結実したものである。文科省・日教組という立場に関係なく、教育を真剣に研究する研究者と現場は、日本の知識注入型・一斉詰め込み型の指導から、豊かな体験に基づいた多角的な思考力を育てる支援指導への転換が必要であると 1980 年以降一貫して提言してきた。これが 2002 年指導要領の「学校五日制」「新学力観」「詰め込み型必修教科時数の精選削減と総合的学習の時間新設」となった。この新しい大きな理念への転換は、いまだに高度成長型社会の夢の残像を引きずる現実の社会で批判を浴び、「学力低下の危機」「脱ゆとり」などのキャンペーンをあげ、2012 年指導要領改訂で、

文科省は方針転換したと言われる。総合の時間はその象徴で、時数は減らされ、現場では「やがてなくなるのでは」という受け止めがある。

しかし、文科省は教科審声明で「今後も総合がなくなることは絶対になく」、発展継続させてとしている。今回の改訂の時数減は、現場の実態に合わせて運用可能な時数への引き下げであり、その分内容の充実を迫られているのだ。「学力低下」の引き合いに出される PISA 型学力観とは「新学力観」そのものであり、2012 年指導要領は、2002 年指導要領の方針を転換したのではなく、むしろ精選充実したと考えるべきで、総合学習こそ PISA 型学力（学力テスト B 問題）を伸ばす場所として発展させることが必要とされるはずである。

③総合は現場での積み上げから

次に、総合は上から押しつけられたものなのだろうか。

総合的学習の時間は、教科領域の枠を越え学習を統合する「生きる力」を育むために、その学校独自の「直接体験」を重視する。そのため、具体的内容や目標は学校独自に立案できる。これは自分たちで考える伝統のない日本の学校に「初めて考える自由が与えられた画期的な変化だ」といわれる。本当にそうだろうか。

明治に学校ができたときから、学校は地域の人々の熱い期待をになって地域の支援によって支えられてきた。学校もまた地域と共に歩み、教員はこどもの背後にある地域を見つめて実践してきたはずである。学校の校歌には必ず地域への賛歌が歌われる。石川達三「人間の壁」や灰谷健次郎「兎の目」に描かれる学校を思い浮かべてほしい。大正自由教育の時代と戦後民主教育では、生活単元・コアカリキュラムという各学校独自の教育があった。

上からの画一統制が強かったり、学校が地域から離れる傾向が強まったのは、15 年戦争後半の皇民化教育と戦後の高度成長期である。戦後の中学校で言えば、「勉強と部活だけに集中すればよい」という雰囲気が強まった 1970 年以後である。もともと学校の存在自体が地域の中心となっていた小学校と異なり、中学校では「学校は部活と勉強」という傾向が強まり、地域との絆を欠く傾向が強かった。高度成長期を通して勉強のゴール＝進学・就職は生徒を地域から切り離して世に送る行為だった。部活動も、生徒・地域のための文化・体育活動として始まったが、規模が拡大されるにつれ、自己目的化していった。中学生になると部活と塾が忙しくて、中学生が地域から消えるのである。

1980 年指導要領で生まれた「ゆとりの時間」は、転換のはじまりだった。この時間をどうするかで各中学校は悩み、中には放課後と部活の時間だけが長くなる学校もあった。しかし、ゆとりの時間は決してゆるみになったのではない。多くの学校で、学年主任や教務主任、特活主任などの中堅教員が、「ゆとりの時間」を「学年活動の時間」「体験活動の時間」として、それぞれの学校にあった課題に取り組む活動を考え実行した。私は 1983 年に教員になったが、荒れた学校を建て直そうと行った大先輩の学年主任の「地域学習」の実践を知っている。その荒れた学校に赴任した 4 月 1 日の晩、学年主任は「学校は、地域に支えられている。その地域の思いとつながることなしに学校は建て直せない。」と言い、私を連れて地域の開拓農家を周り、自治会の方にあいさつ回りをすることから始めたことを覚えている。当時の中堅教員は、戦後教師となった夢と情熱を内面に熱く持ちつづけて、それぞれの地域と学校に根ざした実践が作られ、私たち新米教員はその背中を見て学んだ。

「総合的学習の時間」は、全国各地の無名の中堅教員の地道な努力による「ゆとりの時間」の実践

をを教科として制度化したのである。

④中学校の課題は地域の課題～総合学習は地域に学ぶだけでなく地域を作る～

7年前本校に赴任し、生徒の表れの「異常さ」に身を置き、生徒の様々な問題行動・不適応行為に付き合い保護者や地域の人々の苦情や抗議に対応しながら、これは背景に地域社会全体が抱える問題があると考えた。先に述べた先輩教員の「地域に学ぶ」実践以外に解決策は考えられなかった。

ただ、あの時と違ったのは、この校区はこれだという、地域に核となる存在が無いことだった。様々な人、組織、ネットワークはあるが、それらが結びついていない。過去数年の規制緩和・自由化・グローバル化などの動きの中で、K中とその校区の人々は、バラバラに集まってお互いに関わり合えないように思えた。

まず最初にH地区地域の中心的存在として、職場体験の講話をお願いしようと「マルイ製茶」を訪れたとき、「久しぶりに先生が来たな。実は私はK中学校設立委員だったんですよ」といわれて気がついた。「開拓地域の真ん中に、みんなで土地を出し合って中学校用地を設定したんだ。」K中の学校そのものが、地域の核になるように計画されて作られたのだった。T地区の街の各所に公園を置き、それを遊歩道でつなぐ。そのネットワークのほぼ中心にK中が存在する。

都市化されて十数年。2万を超える人口、様々な企業・事業所は、本校区の最大の財産であり、多くの人のつながりと力が存在している。これらの力が、人が育ち生活する場所としては、まだうまくつながっていないから、子どもたちがおかしくなっている。ならばK中が、まだつながっていないK中校区の人々の新しい絆になればいいのだと考えた。そのような思い出、本校での総合学習を作り上げてきた。それを以下に紹介する。

(2)1年生「地域に学ぶ～地域 yosakoi 交流～」

①主活動の流れ

3つの小学校から生徒が集まる本校1年生は、春の遠足で学級対抗歌声コンクールを行い、それを皮切りに1学期の総合でまず学級ごとに「K中 YOIYASA」(YOSAKOI おどり)を踊る練習をおこない、1学期末には学年選手権を行い、学年学級の一体感を築きあげる。夏休みに地域の夏祭りで選抜メンバーが出演し、地域デビューを飾る。2学期になると、体育大会での「全校 YOSAKOI」を行い、1年生も後列を構成し学校全体を支える。踊りは各クラスから自主的に選抜された実行委員が、2年生から手取り足取りで教えてもらい、それをクラスに伝えるのである。

メインとなる活動は、2学期の地域 YOSAKOI 交流会である。まず、自治会関係者から地域の歴史を語ってもらい、開拓を経験した地域の年配の方の思いを知る。その上で2学期後半交流会を持つのである。T地区の3つの老人会の11月例会を中学生との交流会としてあらかじめ設定してもらい、3つの公民館を自治会に押さえてもらってある。各クラスの実行委員と教員が、老人会役員と打ち合わせをし、2時間の交流プランを考え、2～3学級を1集団として小グループで老人と交流する企画を

作る。生徒たちの企画で、昔の遊びや百人一首などのレクを行ったり、老人と紹介カードを交流したりする活動を行ったあと、最後に YOSAKOI を披露するのである。

交流会

②学年の一体感と自尊感情を育てる

K 中に入学してくるとき、生徒たちは不安と孤立感を持っている。YOSAKOI を学ぶことで、学年のみんなが同じことをできるようになり、一体感を体で感じることができる。特に小学校時代にいじめにあたり孤立していた生徒ほど体を動かしてみんなで踊ることは理屈を越えた安心感を持つようである。この YOSAKOI は、4 年前の卒業生が入学したとき時、地域の YOSAKOI チームに所属していた生徒をリーダーにして実行委員と学年職員で踊りを覚えて学級生徒に伝え、練りの部分は生徒自身が作り上げたものである。この学年の生徒は、2 年生になったとき下級生に踊りを教え、3 年生になったとき、体育大会での全校 YOSAKOI ができあがった。



何より生徒自身が作り上げてきた K 中の伝統であり、踊ることは楽しいし、踊れることは誇らしいのである。中学校生活の入口で、生徒自身が誇りになるものを持ち自尊感情を高めることができる。そして、この「できる」という実感をもって、地域の老人会と交流し、地域の歴史を学びつつ最後に「YOSAKOI」を披露する。

何より生徒自身が作り上げてきた K 中の伝統であり、踊ることは楽しいし、踊れることは誇らしいのである。中学校生活の入口で、生徒自身が誇りになるものを持ち自尊感情を高めることができる。そして、この「できる」という実感をもって、地域の老人会と交流し、地域の歴史を学びつつ最後に「YOSAKOI」を披露する。

③地域の老人会との交流の意味

老人会は、小学校低中学年とは交流が多いが、精神的に不安定な年齢になる中学校では交流事例は少ない。しかし、YOSAKOI という集団演技を持ち、それを最後に披露するという自覚があると、交流会は生徒自身がとても積極的になることができる。老人の昔話を聞くとき、多少の気持ちのすれ違いがあっても、最後の集団演技を誇らしい顔でおこない、それを老人の中には涙を浮かべて見つめる方がいる。人生の襞を重ねたさまざまな思いのこもった表情で見つめられると、生徒たちは理屈を越えた何かを感じるようである。ふだん公園や遊歩道ですれ違っても、老人の存在を全く意識できなかった中学生たちが、声をかけられあいさつを交わす存在になることができる。

体を動かす踊りの習得、老人との学年全体の交流は、1 年生というまだ幼さを残した時期が最もふさわしい。

(2) 2 年生「地域で働く～地域職場体験～」

2 万人代の人口を抱え市内最大の工業・住宅地域である K 中校区には各種事業所が豊富に存在し、働く大人が大変たくさんいる。これこそが本校区の財産である。そこで 2 年生では、地域に働く大人たちの思いを知り、自分たちの将来の職業を体験を通して考えるという総合学習を計画した。

①主活動の流れ

毎年 60 ほどの事業所に協力いただき（ほとんどが本校区内）、学年全生徒が秋の 2 日間の体験活動をメインの目標に、1 学期から夏休みにかけて職業講話・履歴書作り・職場訪問などの計画的に配置さ

れたカリキュラムを学ぶ。

1学期は、地域に働く大人との関わりを持ち、働く大人から話を聞く。地元信用金庫はこの地域の各種事業所に大変密着しており、講師として欠かせない。また、都市開発の最初からこの地域に存在し現在も継続する商店会の組織とつながり、毎年4月の例会に学校職員が出席して校区内の商店や事業所を紹介していただく。職場選択は、毎年実施してきた職場を中心に新しい職場を加えて、1学期を通して希望調査をし体験先と受け入れを決定する。履歴書を書き、接遇練習・電話応対練習などを1学期中に行う。毎年50ヶ所以上の事業所が受け入れてくれる。

夏休みは、受け入れ先事業所に生徒が各自履歴書を持ってあいさつに出向く。これを行うことで事前指導が容易になる。

こうした準備を受けて、2学期は、11月に2日間職場体験を行う。

②地域の働く大人とのつながり

「キャリア教育」が経産省・文科省サイドから推進されている現在、職場体験そのものは、他の多くの中学校の職業体験と同じであろう。

本校の違うのは、地域の職場、地域の働く大人を交流の中心に置いていることである。生産する側からだけの視点ではなく、生活者として再生産する側の視点が現在のキャリア教育には少ない。商店会の役員は、「社会を明るくする運動」の役員で、毎月正門に立ってあいさつ運動をしてくれる人たちである。

日系ブラジル人の企業・商店にブラジル人の生徒が職場体験に行くことは、当然のコースをして設定していた。しかし、これでは地域に働く大人の姿をK中学校として学ばせていることにはならないと考え、日系ブラジル人派遣会社が作った、働くブラジル人の子どもたちのための保育園に日本人生徒が職場体験をするコースをつくった。言葉は通じなくても、こどもの笑顔と、迎えに来る親の愛情は、中学生でも十分学ぶことができる。働く大人が、生活と仕事をどう両立させているかを学ばせる機会とした。

(3)3年生「地域で育つ～子育て未来体験～」

本校区に計画的に配置された多くの公園。都市計画では、これらの公園は、地域のつながりの結節点になるように各公園が遊歩道で結ばれ、それぞれの樹木や花の名前が付けられ、地域の憩いの場となるよう願って作られた。しかし、その願いとは裏腹に、子育て世代の若い親子やさんぽを楽しむ老人が、公園に群れる中学生を、最も声をかけにくい年頃の子として遠巻きに眺める姿があった。中学生は、大人への入口の不安定な自分をもてあまし、公園に集まり群れ、一部は問題行動に進んでしまうのである。K中では、この難しい3年生という年齢に、自分の生い立ちの原点である親の愛情を再確認し、やがて抱く我が子への愛情を学ぶために、地域の幼い子とその親との交流を体験する学習活動を設定した。

①主活動の流れ

この学習は、1学期に「生と性を考える思春期講話」を実施し、さらに2学期に「男女共同参画社会の理念を学ぶワークショップ」や家庭科の教科での地域の保育園での保育体験などの活動にすすみ、最後に秋の1日を100人を超す乳幼児親子と交流する「子育て未来体験」がクライマックスとなる。義務教育を終える最終学年にふさわしい、本校3年間の総合学習の集大成である。

②地域の様々なネットワークとのつながり

子育て体験そのものは、体験支援 NPO の全面協力で行われる。乳幼児親子の募集や助産師講話など、一連の専門的活動は NPO のプログラムに添って行われる。ふわっとは他の地域の組織だが、本校区にも活動メンバーがいて、K 中校区の多くの人とつながっている。体験支援ボランティアとして、本校 pta をはじめ、三松会（K 中校区の踊りの会）の女性や、地元保育園の子育て支援員が関わってくれる。

本校の課題は d v や虐待・放任にどう気づき、どう向き合い、どう克服できる生徒を育てていくかである。本校の子育て体験は、これに挑戦しようとしている。この活動に先立って事前学習として行う「男女共同参画講話」や「生と性の講座」では、「ファシリテーターズ静岡」や静岡県立大の学生サークル、「魅惑的倶楽部」などの出前講座を実施してきた。

(2)新しい実践～地域学習マップ・地域人材読本～

2010 年度より浜松市は「人作り講座」として各校に予算を設定し、学校独自の教育活動の推進にあてようとしている。総合学習の推進役である研修部では、これを地域人材・素材の活用のための読本・マップづくりとして実践しようと考えている。今まで学校が蓄積してきた地域人材や地域教材を、一目でわかるイラスト地図にまとめ、総合や教科学習のワークシートと結合させようというアイデアである。

昨年から少しずつ作成をはじめ、今年は中学校だけでなく小学校からもデータを集めて話題を書き込み、これを本年中に 3 年間使う総合学習ファイルの資料として全校で活用できるようにしたいと考えている。

3. まとめ

総合学習は、生徒から見れば個別の学習を統合し生きる力とする学習であり、学校から見れば、学校独自の課題を、学校が主体となって生徒・保護者・地域と連携して解決するための学習活動である。それは、2002 年指導要領で初めて制度化されたが、それ以前から「ゆとりの時間」を活用した「学年体験活動」として、特に中学校の自覚的な教師達によって各学校が独自に積み重ねた実践の歴史が背景にあった。総合学習に魂を吹き込むのは何よりも現場の教師達が作り上げるという情熱と自覚であり、これを次の世代に伝えなければ行けないと感じる。

最後に、問題点を提起してまとめにかえる。学校が地域の行事に積極的に参加するうえで問題になるのは、学校 5 日制との整合性である。教員は本来自分の住む地域の行事に参加すべきで、勤務地の学校行事に全面的に参加したら、学校 5 日制、教師の週休 2 日制は崩壊する。何よりも教師の自己犠牲による実践は、長続きせず、質の高い教育を提供できない。本校でも現在この実践をすすめる上でいちばん問題となっているのは、夏祭りや敬老会参加の勤務上の扱いである。

総合学習として教育課程で行う実践はあくまで 5 日制の枠内で行うことが原則で、土日の行事参加は地域の教員の分担範囲であろうと思う。部活動も同じである。地域と学校の役割分担と連携のシステムの構築を急がなければならない。現状ではこの問題は教師のボランティアという美名の元に封印され隠されている。学校 5 日制と矛盾しない地域と学校の連携を深める教育活動と人的なシステムの構築を図る必要がある。